

講話

俳句の道

立田 幽石

本日は水巴会（注1）の方々が当道場をご利用くだされ、かくも多数にお集まりくださいましたことは、道場主として光栄に存ずる次第でございます。この際、私にも何か話をせよとの幹事の方からのご命令により、ご覧のとおり花祭の趣向をいたしておきました関係上、釈尊しゃくそんの降誕こうたんに因ちなんでお話を進めながら、「俳句の道」というようなことについて卑見ひけんを述べさせていただきたいと存じます。

1 釈尊の悟り

（1）大自然の生命 真実の自己

ご承知のとおり釈尊は、4月8日、藍毘尼園らんびにおんにおいて誕生めされた時、一指は高く天を指し一指は低く地を指して「天上天下唯我独尊」（天上天下唯我独ただ尊し。）と大獅子吼ししうされたことになっております。

こう申すと、生れたばかりの赤ン坊が口をきくなんて、そんな莫迦ばかな話があるものか。だから仏教は非科学的で低級だとか、天上天下唯我独尊だなんて、独りよがりの思い上りで、封建時代ならいざ知らず、今日では通用しない旧思想であるとか、そんな非難があるかもしれませんが、が、しかしそれは誤解でありまして、釈尊が在世当時の印度の習慣として、ある思想を現わす場合に、よく譬喩ひゆが用いられたためです。

もしその現わさんとする真意を知れば、以上のような非難は^{あた}当たらないと存じます。

では、この「唯我独尊」の譬喩は、何を現わさんとしているのでしょうか。

その真意は^{なへん}那邊（どのあたり）にあるかと申しまするに、それは釈尊のお悟りそのものに外ならないのであります。禅の言葉を借りて言うならば、^{たいし}大死^{ぜつご}一番^{さいそ}絶後に^{けんこんただいちん}再蘇して、^{あが}乾坤^{あが}只一人と^ば立ち上った場であり、さらに別な言葉で表現するならば、^ふ父母^ふ未生^{みしょう}以前に^{いぜん}立ちかえり、^{ほんらい}自己^{めんちく}本来の^{てっけん}面目（^{たんてき}真実の^{けんしやうにゆうり}自己）を^{けんしやうにゆうり}徹見した^{けんしやうにゆうり}端的（^{けんしやうにゆうり}もの^{けんしやうにゆうり}の^{けんしやうにゆうり}ありの^{けんしやうにゆうり}ま^{けんしやうにゆうり}まの^{けんしやうにゆうり}すがた）であります。これが禅でいう見性入理であり、それは釈尊のお悟りと全く同じものです。

では、なぜ見性すれば「天上天下唯我独尊」なのかということについて、^{すこ}些しく説明させていただきます。

「父母未生以前」とは、陰陽分れざる以前、^{かいびやく}天地開闢（世界のはじめ）以前、つまりは相対を絶した絶対を意味しています。「父母未生以前に立ちかえる」とは、この身このまま絶対界に^{たにゆう}打入するの謂いであり、その絶対界に打入する手段として、禅では^{ざぜん}坐禅を組んで^{こうあん}公案の^{くふうざんまい}工夫三昧になるのですが、今は禅のお話をするのが目的であり、^{じゆきやう}皆様のよくご存じの^{じゆきやう}儒教の方の言葉を借りて、その意味を^{ふえん}布衍させていただきます。

^{もうし}孟子は【^つその心を^{せい}尽くせば性を^{せい}知り、性を^{せい}知れば天を知る。】という^{せい}ことを申しています。「その心を尽くす」とは、日常は^{ねんりよ}たらかさせている^{おこ}五欲七情という^{おこ}ような^{おこ}念慮の、^{おこ}よって^{おこ}もって^{おこ}起るところの^{おこ}本源を^{きわ}究め^{きわ}尽くす^{きわ}ということ、^{いったい}そういう^{いったい}心は^{いったい}一体^{いったい}どこから^{いったい}生ずるのであるか、その^{てっけん}根源を^{てっけん}徹見すれば、性を^{せい}知ることが^{せい}できる^{せい}という^{せい}のです。

「性を知る」とは、後で申しますが、仏教で言えば仏性とか法性とかいう、ものそのものの本性を知るという意味です。これを禅では「性を知る」と言わないで、もっと力強く「性を見る」…見性…と申しています。その見性がいけたことが悟りを開いたことであり、理において「天上天下唯我独尊」なわけなのですが、さらにそのわけを明らかにするために、「性を知れば天を知る」と言った孟子の言葉を検討してみましよう。その言葉の意味を把握するには、『中庸』の中の語を参考にした方が判りやすいと存じます。

『中庸』に【天命これを性と謂い、性に率うこれを道と謂う。】という語があります。ここに「天命」の命は、命令の命でもなく宿命の命でもありません。これは「生命」の命です。ですから、「天命」とは大自然の生命という意味です。その大自然の生命の現われが、そのままそのものの本性であるという意味を「天命これを性と謂う」と言ったものです。

ですから、山は高く聳えているのが山の性であり、川は低く流れているのが川の性であり、鳥は空を翔けるのが鳥の性であり、魚は水に泳ぐのが魚の性であります。同じ意味において、松には松の性があり、人には人の性があるはずです。

これらの性はすべて例外なしに天命そのものの現われであるから、孟子は「性を知れば天を知る」と言ったものです。孟子が「天」と言ったのは元より天命のことです。

その天命は大自然の生命そのものなので、これは絶対のものです。老子の謂ゆる「物あり天地に先だつて生ず」る底の第一原因、いわゆる天下の母であります。これより尊いものはないと申しても差し支えないでしょう。これが父母未生以前における自己本来の面目であるというなら、それは「天上天下唯我独尊」と言い得るでしょう。これが釈尊のお悟りであり、禅の見性なのであります。

孟子が言ったように、その心を尽くして性を知り、性を知ると同時に天を知ること、推理推論によらず、理窟道理に亘らず、坐禅を組んで迷いの心を尽くし、虚妄の小我が大死一番して悟りの眼を開き、真実の大我（真実の自己）が絶後に再蘇して乾坤只一人と立ち上った端的を誕生仏をもって譬喩し、その唯一絶対の端的を「天上天下唯我独尊」の語をもって表現したのです。ですから「唯我独尊」の我は、何の某と呼ばれる小我でなく、「只一人」の我は、真実の大我を意味しています。

ここまで申せば、もう誕生仏の譬喩は時代遅れでもなく思い上りでもないということがご理解願えると存じます。

（２）差別界の真相 仏性と法性

さてお話を前に戻して、『中庸』の【天命これを性と謂い、性に率うこれを道と謂う。】の内容を、さらに深く掘り下げてみましょう。

先ほど、天命そのまゝの現われが、山川草木禽獣虫魚乃至は（または）人間の性であるという意味のことを申しました。これはまた、釈尊のお悟りそのものの内容でもあります。

それは、釈尊が臘月八日、明けの明星を一見すると同時に、大徹大悟めされた時のお言葉として有名な「一仏成道觀見法界、山川草木悉皆成仏」（一仏成道して法界を觀見すれば、山川草木悉く皆成仏す。）なる語によって知ることができます。

これは、悟りを開いて「天上天下唯我独尊」と立ち上り、さて周囲を眺めてみれば、山川草木禽獣虫魚乃至人間に至るまで、皆悉く天命のままなる性の発露であり、皆な悉く仏と等しい智慧徳相を具有しておるわい、という驚嘆の告白であります。これは、性の面を特に強調した悟りの内容であります。

続いて「性に率うこれを道と謂う」について掘り下げるのが順序ですが、それは後で「俳句の道」に触れる時、「道」の真意を述べます

ので、しばらくお預^{あずか}りしておいて、さらに性について検討を加えておきたいことがございます。

それは儒教の方では、「天命これを性と謂う」というだけで、そこに人間の性と人間以外の物の性との間に区別を立てていませんが、仏教の方では、これを区別しています。先^{さき}もちよっと触れた言葉ですが、仏教では、便宜上、ものそのものの本性を、人間という器に与えて「仏性^{ぶつしょう}」と呼び、人間以外の物に与えて「法性^{ほっしょう}」と呼ぶ習慣になっています。

それは、儒教で取り扱っている「道」は、人間の「道」、即ち倫理道徳が主であり、従って性と言えば、まず人間の性に限られているから分ける必要がないからであります。仏教においては、人間の「道」は元よりであります。自然現象を「道」と呼ぶ時もあり、芸術を「道」と呼ぶ時もありで、性も区別しておいた方が便利だからであります。

で「天上天下唯我独尊」と見た時は、どちらかと言えば「仏性」に重きを置いた見方^{みかた}であり、「山川草本悉皆成仏」と見た時は、どちらかと言えば「法性」に重きを置いた見方であるということが出来ます。

2 俳句の道

(1) 真理の体・相・用 儒教の場合

さて、いよいよ「道」のお話になるのですが、「性に率うこれを道と謂う」で、「道」というからには、今まで申した本然の性そのものに順応していなければなりません。

言い換えれば、大自然の生命を無視しては、如何^{いか}なる意味の道も成り立ちません。この点、自然界の「道」であろうが、人間界の「道」であろうが、乃至^{ないし}(または)俳句を含めた芸術の「道」であろうが、例外はありません。これは単なる説でなく、そうなくてはならぬ事実なのであります。それが事実であるということを立証するために、さ

らに突っ込んで検討してみましよう。

今まで引用してきた『中庸』の言葉は、「これこれをこれこれと謂う」というので、単に「道」の定義として受け取るには誠に理解しやすい言葉ですが、あれだけでは、動かすべからざる事実であり、真理であるとの確固たる裏付けがありません。

そこで私は、単なる定義でなくその内容は動かすべからざる事実であり、真理であるという裏付けとして、別の面からの解説を試みたいと思います。

私は、「天命・性・道」という言葉は、一つの真理を^{たい}体・^{そう}相・^{ゆう}用(注2)の三方面から眺めた時の表現であると見ております。ですから、「天命」も「性」もそうですが、「道」も真理そのものを離れてはあり得ないと解しています。そこで俳句も「道」である以上は、そこに動かすべからざる真理性を持たねばならぬというのが私の主張なのですが、それを言う前に、お話の続きの別の面からの裏付けを急ぎましよう。

すべて有形無形を問わず、物事はこれを体相用の三方面から眺めることができます。

例えば水ですが、水は水素2原子、酸素1原子からなる化合物ですが、これは時間空間を超越して動かすべからざる事実で、 H_2O でなければ水ではなくなってしまう。これは、水をその体から眺めての考え方です。

もし水は、常温においては無色無味無臭の透明なる液体であると言い、常に^{ほうえん}方円の器に従いその表面は水平を保つと言う時は、その相の面を語っているので、落差によって水力電気を起し加熱によって蒸気缶(ボイラー)を動かすと論ずるなら、それは水の用の面を説いていることになります。

しかもH₂Oという水の体を離れて、水平を保つという相のあるはずもなく、この性があればこそ水力電気も起るといふわけで、三即一であります。

無形の真理もまた、これを体相用の三方面から眺めることができます。体から眺めてこれを「天命」と名づけ、相から眺めてこれを「性」と名づけ、用から眺めてこれを「道」と名づけると解釈すれば、「天命・性・道」は、単なる言葉の定義でなく、真理そのものを、三つの方面から眺めて表現しているに他ならないということになります。

「天命」や「性」が、真理そのものであるということは、今までに触れてきたお話によってほぼご理解が願えたかと存じますが、私は、俳句も「道」である以上は、真理を度外視しては成り立たない、つまりは、単なる道楽や観念の遊戯や言葉の彩^{あや}であってはならぬという主張を強調するために、さらに仏教の思想・言葉を借りて裏付けたいと存じます。

(2) 涅槃^{ねはん}の体・相・用 仏教の場合

真理を体相用の三方面から眺めて、儒教では「天命・性・道」と呼んでいると申しましたが、仏教では何と表現しているでしょうか。

釈尊は「真理」という言葉は用いておられないが、唯一絶対の真理、第一原因たる真理そのものを「涅槃^{ねはん}」と呼んでおられます。その「涅槃」を体の面から眺めて「根本^{ふえき}不易」と見られ、その相から眺めて「諸法実相」と見られ、その用から眺めて「流行^{むそく}無息」と見られています。この思想は経^{きょうもん}文の随処に説かれていますが、その一例として皆様にお親しまれている経文の中から、該当する言葉を掲げてみましょう。

根本にして不易^{かわ}(易らないこと)なる「涅槃」の体、つまりは「天

命」に相当する大自然の生命は、『般若心経』の中に【不生不滅
 不垢不淨不増不減】(不生にして不滅、不垢(垢さず)にして不淨、
 不増にして不滅)と説かれています。

諸法(万物)は、そのままにして実相なりとする「涅槃」の相、つ
 まりは「性」に相当する大自然の相、「仏性」といわれ、「法性」と
 いわれる差別界の真相は、『法華経』の中に【娑婆即寂光淨土】(注3)
 という言葉で表現されています。

そして生々流転、流行して息むことなき「涅槃」の用、つまりは
 「道」に関しては、人の「道」ばかりでなく広く『涅槃経』の中に
 【諸行無常 是生滅法】(諸行は無常なり 是消滅の法なり。)(注4)
 と言い切っています。ただし、ご承知のとおりその後【生滅滅已
 寂滅為楽】(生滅滅し已って(已んで) 寂滅を楽しみと為す。)(注
 5)の語があって、その「寂滅」の解釈によって自力宗と他力宗の
 救済を見出すのですが、それは宗教の分野に属するもので、本日のお
 話の主題から離れ過ぎますので、後半には触れないでおきます。

が、ただ俳句も「道」であるからには、単なる楽しみでなく、そこ
 に安住の地を見出し、法悦の境が得られるはずであるとだけ申してお
 きます。

(3) 俳句の道

それよりも私の言いたいのは、咲く花や散る木の葉に美を感じ、世
 相や人生に詩を憶うにしても、その根本において、「大自然の生命」、
 「諸法実相の相」、「生々流転の妙」を忘れてはならないということ
 です。これさえ忘れないならば、花鳥諷詠も人事俳句も立派に真理に
 即した「道」であり、第二芸術だなんて評するのは見当違いも甚だし
 いものと言うべきであります。

この点で、俳句における諸先輩が「生命の俳句」とか、「実相観入」
 とか、「不易流行」とか言われたお言葉に、心から頭が下ります。そ

してすべて一芸の堂奥^{どうおう}に達すれば、禅の修行によらずとも、自ら釈尊のお悟りと等しい境致に到り得るものであるということをつくづく感ずる次第であります。

だいぶ時間も長くなりましたので、その実例を挙げて今日のお話の結びといたしましょう。

芭蕉翁^{ばしやうおう}の有名な「古池や」の句が生まれた動機とされている言い伝えに、翁が兼々参禅していた仏頂和尚^{ぶつちやう}との間の問答があります。

折しも五月雨の頃でもあったのでしょう。和尚が深川の芭蕉翁の庵を訪ねられた時、挨拶代りに「今日の事、如何？」と問うたら、翁は目前の庭の風情をそのままに「雨過ぎて青苔うるおう。」と応じました。そしたら和尚が重ねて「青苔いまだ生せざる時、如何？」と問うたに対して、翁は「蛙とび込む水の音。」と答えられた。

この見解^{けんげ}に対して、和尚は、翁が悟りを開いていることを認められたということです。ここで「悟りを開く」と言ったのは、見性^{けんしやう}のことで、「法性」を徹見したとの謂いです。つまりは、大自然の生命そのままの相を「蛙とび込む水の音」に見たのであります。和尚が「青苔いまだ生せざる時」と切り出したのは、元より「父母未生以前」の消息を問うているのであります。そうでなくては、禅家の問答にはなりません。つまりは真理の体を問うたに対して、真理の相をもって答えているのです。これは悟りを開いた見性の眼^{まなこ}をもってしなければ、^{すべ}できる術ではありません。だから和尚も、芭蕉の見性を認められたのです。

後で翁は、和尚の問いなる「父母未生以前」の端的を、「古池や」の五字で現わして、

古池や蛙とび込む水の音 芭蕉

なる句が生まれたのだと言われています。

私はこの句から、「寂然不動たる根本不易の世界」と「流行して息まざる流転の世界」との「調和した寂光浄土」を感得するのであります。「易を善くする者は易を論ぜず。」で、何も芭蕉翁がそんな理窟を考えながら作句されたのではありますまいが、その道に達した名人の句は、自ずから天地自然の理に叶うのでありましょう。

終りに臨んで、水巴先生（注6）のお句を掲げて、私なりの勝手な鑑賞をさせていただきます。

白日はわが^{たま}靈なりし落葉かな 水巴

私には「天上天下唯我独尊」と聞こえるのです。

あま 天つ日の^{じゃくまく}寂寞さ牡丹咲き出でぬ 水巴

私には「山川草木悉皆成仏」と響くのです。

私は私なりに、前句は「仏性」を詠い、後句は「法性」を詠じられたものとして、常々味わわせていただいているのですが、如何なものか、如何なものか、ご批判を仰ぎたいと存じます。

とにかく、晩年ではございますが、縁あって俳句の道に足を踏み入れたことを、私は心から喜んでいる次第でございます。（注7）

どうかよろしくご指導の程を皆さんにお願いいたします。

（本稿は、俳誌『曲水』昭和39年6月号から転載させていただきました。はなはだ僭越ではございますが、ご文章が長い見出しを付けさせていただいております。また、漢字を平仮名に変える等読みやすくさせていただいております。）

編集部注

（注1）水巴会：俳誌『曲水』の同人の会。

（注2）体・相・用：命体・性相・道用。本体・形相・作用（如々庵老師）。

（注3）娑婆即寂光浄土：娑婆とは、対立・衝突・矛盾が目の前で行われている、この現実の世界のことである。寂光浄土とは、人間も万物も、そ

れぞれ自らの本然の性のまま差別歴然と存在し、生滅流転しながらも、しかもそれぞれにその所をえて、全体として一大調和をなしている世界のことである。この現実の世界に大調和の世界（世界楽土）を実現することが大乘仏教の目標である。

大乘仏教の世界観については、立田英山著『人間形成と禅』に詳しく述べられている。

- (注4) 諸行無常 是生滅法：存在するものはすべて、流転変化し、生あるものは必ず滅すること。
- (注5) 生滅滅已 寂滅為楽：一切の相対的なものを「生滅」の2字で代表させた。生滅流転・差別相対の世界を超越して、不生不滅・不易絶対の世界に入ること。真実の自己を徹見すれば、真の安心と真の満足とを得ることができる。
- (注6) 水巴先生：渡辺水巴先生。俳人。俳句を内藤鳴雪・高浜虚子に学ばれ、大正5年『曲水』を創刊主宰された。句集に『水巴句帖』『白日』『富士』『新月』等がある。昭和21年逝去。
- (注7) 幽石翁と俳句：幽石翁は、山梨県清里村に疎開された昭和20年に俳句を始められた。『曲水』に投句を始められたのは、昭和23年頃。水巴先生逝去後、『曲水』主宰を継承された大谷碧雲居先生と親交を深められた。

なお、ご令室の立田珠月様（俳号：紫葉）は、明治42年頃から『曲水』を購読しておられ、幽石翁の『曲水』への投句のご縁をつくられたのではないと思われる。珠月様の遺句は、『合掌』152号で紹介された。

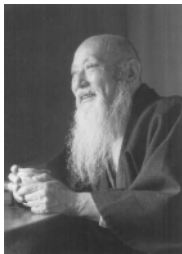
主人

独酌の縁に影あり山桜

草木瓜ほけや野火かぎりなくひろごりぬ

蒼天そうてんを突く八ツ岳雪真っ白

著者プロフィール



立田幽石（道号 / 英山。本名 / 鐵二^{てつじ}）

明治26年、東京生まれ。東京帝国大学理学部卒業。中央大学予科教授、日本医科大学教授を歴任。両忘庵釈宗活老師に参じ法つを嗣ぐ。人間禅を創設し第一世総裁となる。師家。庵号 / 耕雲庵。昭和54年帰寂。